第２章　香取市の歴史と香取遺産

１．歴史的背景

（１）原始

縄文時代は気候の温暖化による海水面の上昇で、台地上及び台地斜面部を中心に多くの貝塚が形成された。北部の台地上や利根川の自然堤防上には各時代の遺構が密集して分布するが、特に縄文時代と古墳時代の遺跡が多い。出土遺物から霞ケ浦周辺の遺跡との共通点も多く、かつての「香取の海」を中心とした文化圏を形成していたと想定できる。

①人々の営みの始まり

人々の生活が営まれ始めたのは、小見川地区の阿玉台北遺跡から出土したナイフ形石器等から、旧石器時代と考えられる。2 万年前の千葉県北部は現在に比べ寒冷な気候で、下総台地周辺は海水面の低下により、乾燥した台地と深い谷が広がっていた。

②「香取の海」沿岸の集落形成と貝塚

縄文時代は、「香取の海」と呼ばれる広大な内海の沿岸に多くの集落が営まれていた。集落跡や貝塚の調査例により、動植物や魚介類を採集して生活を営んでいたことが明らかになっている。国の史跡である阿玉台貝塚、良文貝塚のほか、下小野貝塚、城ノ台貝塚（木内・虫幡）は全国的にも著名な貝塚である。他にも向油田貝塚や木内明神貝塚、白井大宮台貝塚などがある。

阿玉台貝塚標柱

良文貝塚や阿玉台貝塚は、全国有数の大型貝塚密集地で、いずれも主にハマグリ・アサリなどの海水産の貝で構成され、縄文時代中期を中心とした貝塚である。特に、阿玉台貝塚は約５千年前の縄文時代中期前半の阿玉台式土器の標式遺跡であり、考古学史的にも重要な遺跡である。良文貝塚出土の香炉形顔面付土器は県指定有形文化財となっている。ほかにも、下小野貝塚は、昭和 25（1950）年の発掘調査の際に出土した土器によって縄文時代中期初頭の下小野式土器の標式遺跡となっている。また、城ノ台貝塚は縄文時代早期の大規模貝塚として知られる。

香炉形顔面付土器

良文貝塚については、昭和 4（1929）年に「貝塚史蹟保存会」

が結成され、地元の人々により遺跡と出土遺物の保護がなされてきた。

現在、田園空間博物館まほろばの里（貝塚）では、良文貝塚出土品・香炉形顔面付土器レプリカなどを収蔵、展示している。

③「香取の海」を通じた文化圏

弥生時代は、稲作や金属器が我が国にもたらされ、大きく社会状況が変化した時代である。「香取の海」を望む台地縁辺部ならびに利根川（旧鬼怒川）の自然堤防上に弥生時代の遺跡が残る。

標高約 50mの黒部川沿いの台地上に立地する小見川地区の阿玉台北遺跡からは、茨城県の南部から千葉県の北部に分布する弥生時代中・後期の土器が出土している。また、阿玉台北遺跡から北西約 10 ㎞のササノ倉遺跡（織幡）からも同様の土器が一括して出土している。これらの遺物の出土状況から、「香取の海」一帯が水上交通による密接なつながりを持つ一つの文化圏を形成したと考えられる。

④豪族たちによる古墳の築造

台地上ならびに自然堤防上に多くの古墳・古墳群が残されている。中でも、三ノ分目大塚山古墳（市指定史跡）は、墳丘長 123mの規模を誇る県内屈指の大型前方後円墳である。古墳時代中期の５世紀前半から中頃に築造されたと考えられる。この古墳からは、長持形石棺と大型の円筒埴輪や形象埴輪が確認されている。利根川下流域最大規模の大塚山古墳の被葬者は、広大な「香取の海」の水上交通を掌握していた豪族であったと推察される。

三ノ分目大塚山古墳近景

山之辺手ひろがり３号墳（円墳）、大戸宮作１号墳（長方墳）からは、被葬者の頭部をのせるために作られた「石枕」とそれに添える「立花」が出土している。石枕と立花を用いた葬送儀礼は、「香取の海」沿岸地域で４世紀終わり頃から６世紀前半頃まで流行した様式である。

石枕・立花出土状況
（大戸宮作１号墳）

６世紀中頃に、城山第１号古墳（前方後円墳）が黒部川下流西側の台地上に造られ、円筒埴輪、人物・馬・家などの形象埴輪が出土している。埋葬施設は横穴式石室で木棺を伴い、石室内からは舶載の三角縁神獣鏡をはじめ、大刀や鉄鏃などの武器や鎧・冑などの武具、金属製の冠などの装身具、馬具などの多くの副葬品が検出されている（県指定）。特に三角縁神獣鏡は畿内を中心とした地域に多く出土していることからヤマト政権との深いつながりが推察され、被葬者は当時

この地域を支配していた下海上国造に関係する人物と推定できる。

現在、城山第１号古墳出土品や大戸宮作１号墳の石枕、三角縁神獣鏡レプリカなどを、香取市文化財保存館で収蔵、展示している。

仏教が伝わると全国的に寺院の造営が始まり、７世紀末頃には古墳の造営はされなくなる。当地方で最も古い木内廃寺跡は７世紀後半の建立で、その西方約１㎞にある虫幡の清水入瓦窯跡から出土した布目瓦はこの寺院に供給されたものである。このことから寺院建立のための専門技術を持った工人集団がこの地に定着していたと推定できる。

また、岩部のコジヤ遺跡から出土している「瓦当笵」は、全国的にも類例が少なく、瓦生産に係る工人の存在が想定される。

（２）古代

奈良時代の天平 12（740）年ごろに「国・郡・郷」が置かれるようになり、現在の市域は下総国香取郡及び海上郡・匝瑳郡に属した。

この時代の遺跡は数多く確認されており、水田耕作に適した広い低地だけでなく、狭い谷部を望む台地上にも集落が営まれるようになった。これは、鉄製農工具の普及などにより、谷奥部まで開墾が可能になったことが大きな要因と考えられる。

①香取神宮の創建

「香取の海」は、外海にもつながる軍事的な要衝と見なされていたことから、その掌握のために香取神宮は茨城県の鹿島神宮と共に置かれたともいわれる。

８世紀後半に中央で権力を占めていた藤原氏が香取・鹿島の両神と枚岡社（大阪府東大阪市）の二神を勧請し、奈良の春日大社を創建した。こうした背景もあり、当時は神宮（伊勢神宮）のほかには香取神宮と鹿島神宮のみが「神宮」の名称で、別格の扱いを受けていた。

海獣葡萄鏡

香取神宮には千葉県の工芸品で唯一の国宝である海獣葡萄鏡が収蔵されており、正倉院宝物（鳥獣花背円鏡）と同型の鏡で、愛媛県の大山祇神社所蔵の鏡（禽獣葡萄鏡）と合わせ「日本三銘鏡」と称される。中国の唐時代（618～907）初期につくられ、８世紀に唐よりもたらされた伝来品である。

②香取神宮に関わる遺跡群

香取神宮周辺では、奈良時代に小規模な集落として成立し、平安時代へと継続する遺跡が多い。香取神宮社領の耕地拡大により、これまで開発できていなかった地域の開拓によって再編された集落と考えられ、多田の多田日向遺跡・多田寺台遺跡や織幡の織幡妙見堂遺跡などが挙げられる。これらの遺跡では、多数の竪穴建物跡のほかに小規模な掘立柱建物跡も発見され、寺に関係する墨書土器や仏具も出土していることから、集落内寺院の存在が指摘される。特に、多田寺台遺跡では神職名と寺を併記した「赤祝連國刀自寺」という墨書土器が出土しており、神仏習合を示す資料として注目されている。

多田日向遺跡空中写真

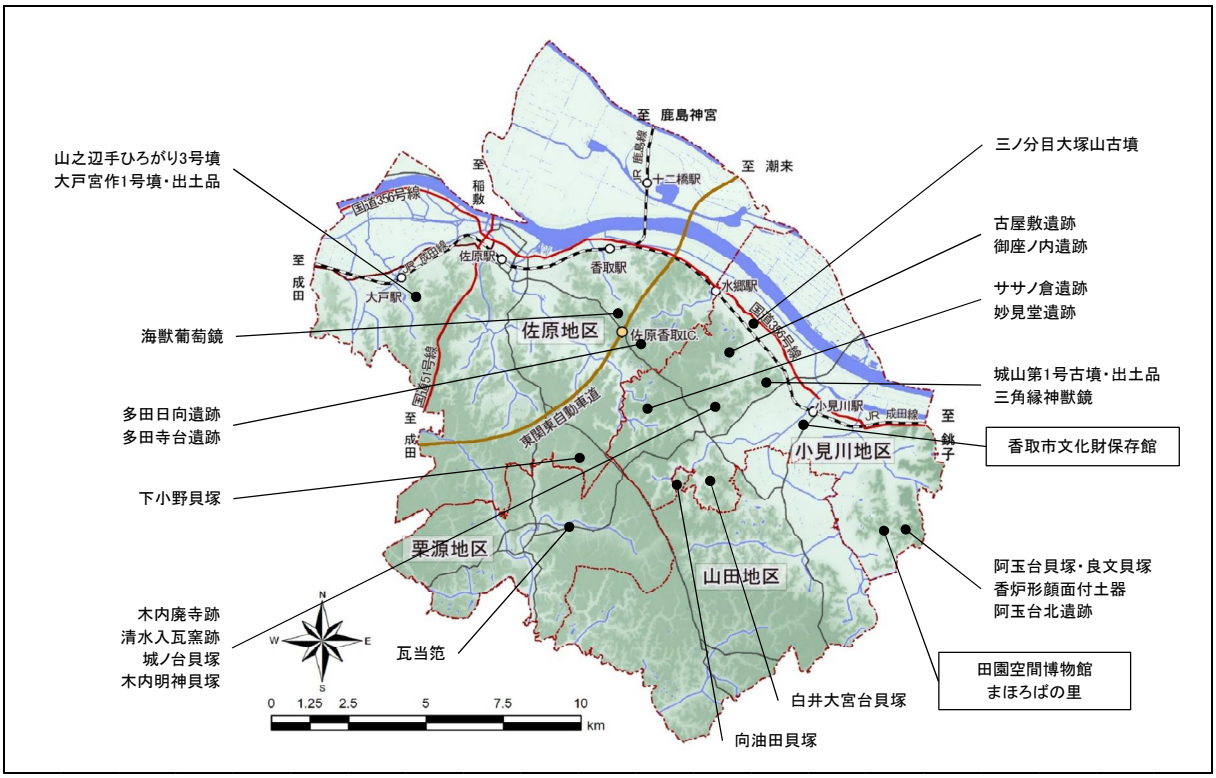
また、戸籍や人名・地名に関する墨書土器が多いのも特徴である。増田の古屋敷遺跡や御座ノ内遺跡では、「山幡」と判読される墨書土器が出土している。正倉院文書中に「下総国釬托郡山幡郷　養老五年(721)戸籍」との記載があり、この墨書土器の発見により「釬托郡」は香取郡を指し、これらの遺跡周辺が「山幡郷」であったことが明らかとなっている。

古屋敷遺跡出土の墨書土器「山幡」

③平将門と平良文

律令制が崩壊していくにつれ、地方においては荘園化が進んでいった。そういった状況のもとで、関東の地では平将門による将門の乱（承平５〈935〉年～天慶３〈940〉年）が起こった。所領をめぐる平氏一族の内紛から、やがては常陸国府を襲撃するなど国家に対する反乱に発展したもので、この乱を平定した一人である叔父平良文の館跡と伝わる地が阿玉台に所在する。この所縁から「良文村」と名付けられ、明治22（1889）年から昭和30（1955）年まで存続し、国指定の史跡である良文貝塚の名称の由来にもなった。

原始・古代に関係する主な香取遺産	
国指定	海獣葡萄鏡、阿玉台貝塚、良文貝塚
県指定	下小野貝塚、城山第１号古墳出土品（三角縁神獣鏡他）、香炉形顔面付土器
市指定	大戸宮作１号墳出土品、三ノ分目大塚山古墳、
未指定他	山之辺手ひろがり３号墳、大戸宮作１号墳、多田日向遺跡、多田寺台遺跡、木内廃寺跡、清水入瓦窯跡、城ノ台貝塚、木内明神貝塚、古屋敷遺跡、御座ノ内遺跡、ササノ倉遺跡、妙見堂遺跡、阿玉台北遺跡



原始・古代に関係する主な香取遺産の分布

（３）中世

中世には、「香取の海」の沿岸には漁業集落である「津」が多数点在していた。香取神宮は、そこを拠点として内海を往来する「海夫」と称する漁民らから深い信仰を集め、その漁労と交易を保護した。

荘園を経済基盤としていたこの時代、農業技術が著しく向上し、生産物を売る市場が栄え、次第に商工業も発達した。また、寺院が建立され、仏教が広く民間に浸透した時期でもあり、仏像や板碑など今に伝わる有形文化財が見られるようになる。

①香取神宮の隆盛

香取神宮には、中世以降の文書等が多く残されており、また旧社家にも、重要文化財である香取大禰宜家文書をはじめとする文書が伝わっている。平安時代末から鎌倉時代にかけては、香取神宮の本殿などは伊勢神宮と同じく 20 年ごとに遷宮、造替が行われており、また周辺に多くの神領を持つなど、「神宮」の社格にふさわしい規模と勢力を誇っていたが、室町時代には、厳しい社会情勢の中でそれを維持していくことが難しくなっていったことが、これらの文書や記録から知られる。

②観福寺の建立

懸仏（十一面観音菩薩坐像）

佐原地区の牧野にある観福寺は、寺伝によると寛平２（890）年尊海僧正の開基とする。本尊は平将門の守護神とされる聖観音菩薩である。千葉氏の祈願所として歴代武将の厚い信仰を受け、中世以降も佐原周辺地の厚い信仰を集めている。

観福寺が所蔵する国指定の重要文化財の懸仏４躯（釈迦如来坐像・十一面観音菩薩坐像・地蔵菩薩坐像・薬師如来坐像）は、鎌倉時代に鋳造されたものである。元は香取神宮本殿に収められていたもので、明治初期の神仏分離令により売り出されたものを個人が買い求め、観福寺に納められた。うち２躯には弘安５（1282）年の陰刻銘があり、元寇のため異国降伏などを祈願して、香取神宮に納められたものと考えられている。

③香取市域における千葉氏

伊豆に流された源頼朝が蜂起に失敗し、安房や上総で苦境に陥っていた際に支援したのが千葉常胤で、鎌倉幕府の成立に携わる有力な御家人であった。常胤には六人の男子がおり、それぞれに領地を与えたことで千葉六党と呼ばれた。そのうち五男胤通と六男胤頼が市域に領地を持っていた。

【国分氏】　国分氏は常胤の五男胤通にはじまり、戦国期には香取郡内で最も有力な在地領主

になっていった。胤通が本矢作城を築き本拠としたとされ、その後、国分氏５代泰胤が、鎌倉時代末期に大崎城に本拠を移したとされている。大崎にある大崎城は、矢作領主国分氏の本拠であったため「矢作城」とも呼ばれていた。城跡は香西川中流域の南北に延びる台地にあり、南北約 800m、東西約 300mという香取地域では大規模な城郭である。城跡からは女性を供養するための永禄４（1561）年在銘の木製卒塔婆が出土している。

【東氏】　東氏は常胤の六男胤頼が東庄周辺に領地を得て在住し、その地の名を取って東氏を名乗ったことにより始まる。東氏の本拠の一つといわれている森山城跡が、東部の岡飯田・下飯田にある。東氏の本家筋は、承久の乱（1221）の軍功により、美濃国郡上郡山田荘（現郡上市）へ移った。現在の森山城跡の規模は、南北約 430m、東西約 620mに及ぶ。構造は直線連郭式と呼ばれる山城で、郭、空堀や馬出などの遺構が良好な状態で残されている。岡飯田の芳泰寺には東胤頼夫妻の墓が残り、市史跡となっている。

東胤頼夫妻の墓

④下総型板碑造立の動き

板碑とは板石状の供養塔婆の一種で、東北地方から九州地方まで広く造立されており、市域でもいわゆる下総型と呼ばれる多数の板碑が分布している。

県内最古級の板碑も多く確認されており、中でも近年市指定文化財となった谷中に所在する正嘉２（1258）年銘の板碑は、最も紀年銘が古いものとなる。また、上小堀の長泉院墓地で発見された板碑は、これに次ぐ正元元（1259）年８月 22 日の紀年銘が刻まれている。高さ 240 ㎝、幅 58 ㎝で、筑波変成岩を用いた県内でも有数の大型板碑である。他にも正元元年在銘の板碑は４点所在しており、いずれも県・市文化財に指定されている。

板碑（正元元年八月廿二日在銘）

市域にはこれ以外にも数多くの板碑が確認されており、板碑の銘文は、文字資料の少ない中世の貴重な資料となっている。

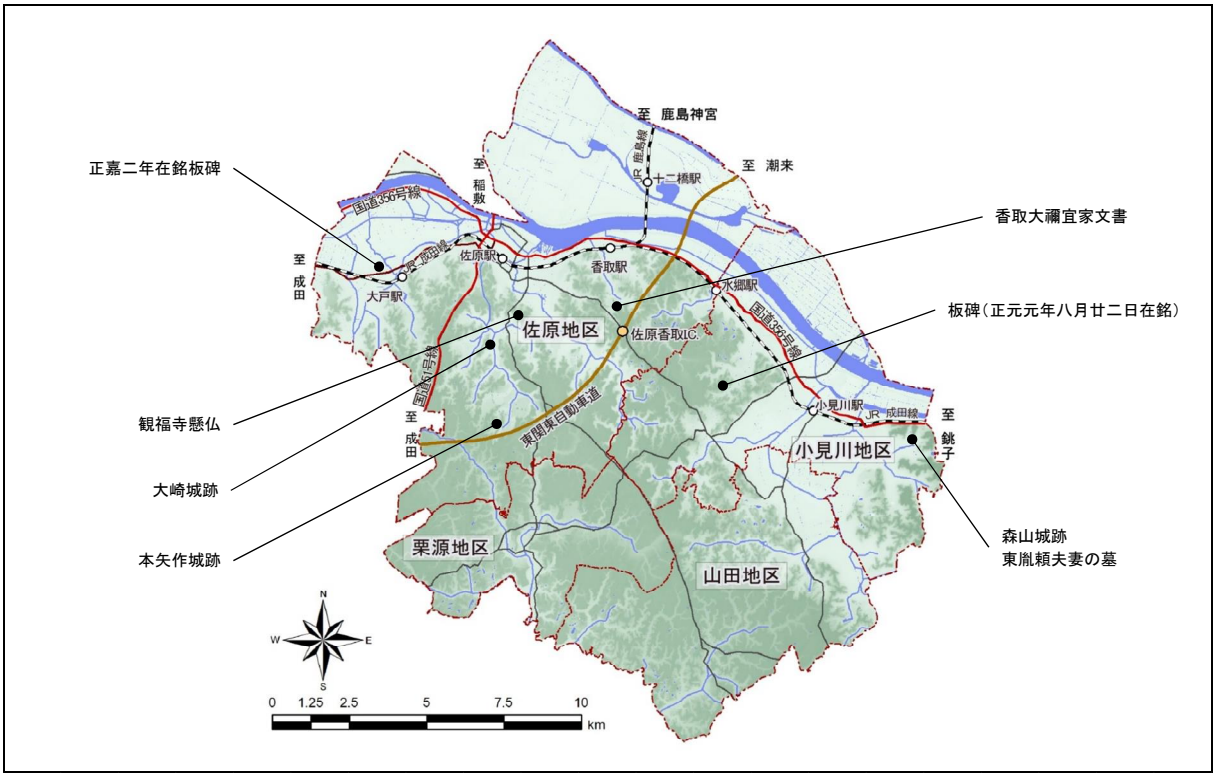
⑤佐原宿の形成

中心市街地である佐原は、中世以前は、「香取の海」と小野川に挟まれてできた砂洲や氾濫原であった。鎌倉時代初期にはじめて「佐原」の名称が現れ、小野川を境として、東側は香取神領、西側が大戸荘であったとされる。

「香取の海」には「海夫」が居住する津が点在していたが、応安７(1374) 年の『海夫注文』には、佐原付近にあった「いとにわの津」「さわらの津」が見える。応安５（1372）年の『佐原村南かう屋同沖名検注雑事帳』（録司代家文書）には、「かへ屋（壁屋)」「天犬（狛犬)」などの商工業者らしき名や、「のと（祝詞)」や「をの座」「かるもの（軽物）座」などの座もみえる。また、嘉慶２（1388）年の録司代家文書には、牛頭天王の近くに八日市場、二日市場の記述があり、この時期、商工業が営まれて、定期市が開かれていたことをうかがわせる。

12 世紀ごろの佐原周辺の状況

中世に関係する主な香取遺産	
国指定	観福寺懸仏（釈迦如来坐像・十一面観音菩薩坐像・地蔵菩薩坐像・薬師如来坐像)、香取大禰宜家文書
県指定	板碑（正元元年八月廿二日在銘）
市指定	大崎城跡、本矢作城跡、東胤頼夫妻の墓、千葉親胤御影、正嘉二年在銘板碑
未指定他	森山城跡



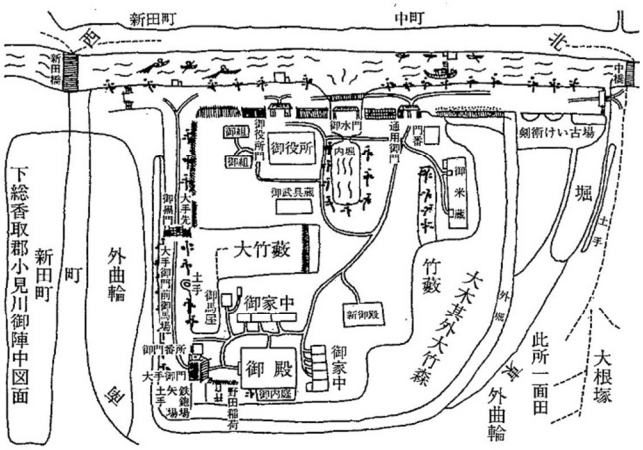
中世に関係する主な香取遺産の分布

（４）近世

江戸幕府の成立により、市域においても大きくその影響を受けた。小見川藩の成立、佐倉油田牧の設置などはその一つに挙げられる。また、利根川の東遷により舟運の航路が整備されたことで佐原や小見川が発展した。政治体制が安定したことで各集落では神楽などの祭礼行事が発展し、佐原では、本宿、新宿それぞれの祭礼の付け祭りとして、山車行事が行われるようになった。市南部の栗源地区は日蓮宗の信仰が篤く、隣接する多古町の日蓮宗寺院とともに、幕府により不受不施派は弾圧を受けた。

①小見川藩の成立

小田原の役での北条氏の滅亡に際して、属将であった千葉氏も滅亡し、小見川の地は、千葉氏系の粟飯原氏から代官の吉田佐太郎の支配に変わった。その後、松平家忠、土井利勝、佐倉藩領などの変遷をたどったのち、寛永 16（1639）年に内田正信が小見川村周辺 8,200 石を加増され一万石の大名となったことから、内田氏領となった。



小見川藩陣屋絵図（市指定文化財・脇家古文書より）

内田氏は慶安 2(1649) 年に下野国で 5,000 石を加増され、同国鹿沼を本拠としたが、享保 9（1724）年に 4 代目の正親が家督を継いだ際に所領の一部を没収され、本拠地を鹿沼から小見川へ移し、小見川藩が成立した。正親の代には陣屋が設けられたとされ、その後、代々内田氏が藩主となり小見川藩は廃藩置県を迎えるまで存続した。

②利根川の東遷とその影響

江戸幕府の大規模治水工事により、東京湾に注いでいた利根川の水量の多くを銚子から太平洋に流すことに成功した。江戸の水害が軽減されるとともに、東廻り航路の難所である房総沖を経由しない、新たな河川航路が開発された。これにより銚子・佐原などの利根川沿いの町が舟運による物資の集散地として発展した。その結果、佐原や小見川の中心部に河岸ができ、酒や醤油などの醸造業が興った。江戸との物資の交流だけでなく文化も流入し、伊能忠敬をはじめとする学者や文人を多数輩出した。

利根川舟運が整備されたことは、人々の旅にも大きな変化をもたらした。香取神宮、鹿島神宮（現茨城県鹿嶋市）、息栖神社（現茨城県神栖市）を巡る「東国三社詣」は江戸時代の庶民や文人の間で流行し、その後の水郷観光の先駆けとなっている。

一方で、利根川東遷で水量が増加した水郷地帯では水害に悩まされ、利根川沿岸は土砂の堆積が進行した。江戸時代の前期において、それまで低湿地帯であった現在の利根川と常陸利根川に挟まれた地域では、徐々に人が移住し新田開発が進んだことで陸地化が進み、新島（十六島）と呼ばれる地域が形成された。

③佐原の繁栄と山車行事

利根川下流の河岸場で最も繁栄をみせたのが佐原であった。利根川の東遷後、台地から利根川に流れ込む小野川の両岸と、これと交差する香取街道を中心に、遅くとも元禄年間(1688～1704)には町並みが形成されていた。

この時期には、利根川水系の舟運を基盤に、江戸と結びついた商品流通機構が整備されたものとみられる。有力商人により周辺地域から集まる年貢米や物資が江戸へ運ばれ、佐原は河岸として大きく発展した。さらに、町外から多くの商工業者や奉公人が移り住んだことで人口の増加を続けた。天保 9 年(1838)には 1,163 軒・5,649 人と、利根川筋で最大級の町場となっていた。こうした佐原の繁栄は、江戸時代末期の赤松宗旦『利根川図志』で「佐原は利根川附第一繁昌の地なり」と評されるほどであり、また、後年の俗謡でも「御江戸見たけりゃ佐原へ御座れ、佐原本町江戸優り」と江戸の盛況に優ると謳われている。

大人形の嚆矢となった
猿田彦（頭部等は市指定）

佐原の山車行事の起源は定かではないが、少なくとも 18 世紀前半にはその原形が見られ、練物（踊り・仮装・造り物などの行列）を中心とした祭礼を始めるようになった。やがて、文化的・経済的に力を蓄えた各町内が意匠を競いながら行事を行う中で、江戸に優るものとして、巨大な飾り物を乗せた山車が現れるようになった。それとともに、江戸祭囃子に各種邦楽の要素と里謡や流行歌まで取り入れ、佐原囃子を作り上げた。

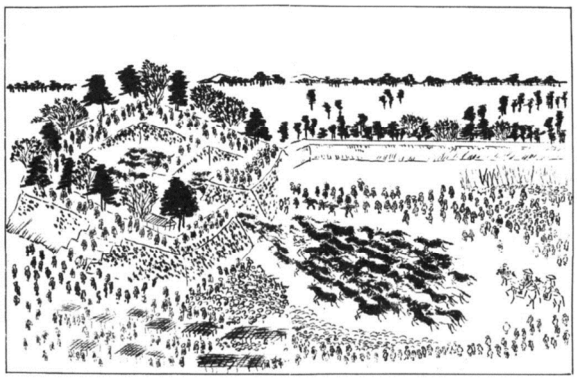
この佐原型の山車と佐原囃子を用いる祭礼は、佐原を中心として、千葉県北東部及び茨城県南部に広く分布している。千葉県内では香取市小見川、東庄町、多古町など、茨城県内では潮来市、鹿嶋市、行方市、稲敷市などに伝播しているなど、周辺地域の祭りに大きな影響を与えており、佐原を中心とする一つの地方的な山車文化圏を形成するに至っている。

④佐倉油田牧の野馬込跡

南西部には、軍馬の養成に適した平地が多かったことから、幕府直轄の牧が設置されていた。九美上にある国の史跡下総佐倉油田牧跡は、野馬の産出を目的として幕府により開発、整備された公的な牧場の中心部である。油田牧は下総台地に設置された佐倉七牧の一つで、九美上

付近を中心とした一帯に広がっていた。野馬込跡は、この油田牧内に設けられた構築物の跡で、追い込んだ野馬を捕獲・選別するための施設である。

牧の周辺には野馬を囲い込むために土手が築かれ、その高さは3～4mほどで、土手に堀が設けられているところもある。現在この地域には畑地が広がっているが、かつて油田牧に含まれた九美上、福田、大根、下小野、岩部、高萩、油田などには部分的に土手が残されていて、その当時の景観を想像することができる。



野馬土手絵図（『下総名勝図絵』宮負定雄 1846）

⑤栗山川流域の日蓮宗信仰

南部の旧栗源町から多古町にかけては日蓮宗、特に不受不施派の信仰が篤かった地域で、江戸時代には多くの寺院や檀林（僧侶の教育機関）が開かれた。この宗派は幕府からは禁制の宗教として扱われ、特に寛文年間（1661-1673）以降は事実上禁止、弾圧されるようになったため、密かに活動を続けた時期が長く続いた。

苅毛地区に所在する仏性山実相寺は日蓮宗の寺院で、創建年代は未詳であるが、明応3（1494）年日久上人の代に真言宗から日蓮宗に改宗したと伝わっている。延宝2(1674)年には、同寺に日賢により不受不施派の常葉檀林（市指定史跡）が開設された。一時は隆盛を極め、多数の学僧のための宿坊が建ち並んでいたが、江戸中頃の火災により檀林の堂宇は焼失したといわれ、山門（市指定建造物）だけが今に残った。

実相寺山門

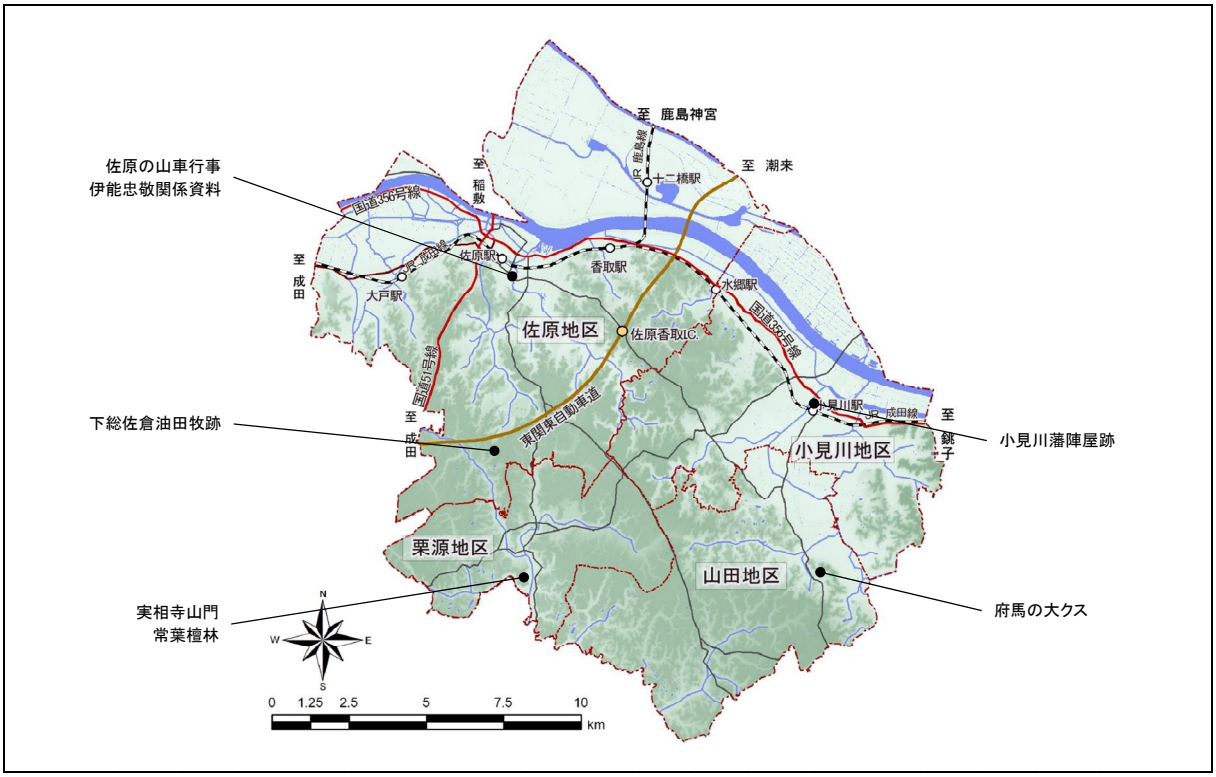
⑥府馬の大クス

山田地区にある府馬の大クスは、樹齢1,300年とも1,500年とも伝わる古木で、府馬字山ノ堆に鎮座する宇賀神社の境内にある。古くから「府馬の大クス」、あるいは「山ノ堆の大クス」と呼ばれ、当地域髄一の巨木として親しまれてきた。大正15（1926）年に大クスが国の天然記念物に指定された際はクスノキとして告示されたが、のちにタブノキであることが判明した。今ではこれも、大クスにまつわる逸話の一つとなっている。

『下総名勝図絵』の大クス

弘化３（1846）年に刊行された宮負定雄（みやおいやすお）の『下総名勝図絵（しもうさめいしょうずえ）』では、大クスとその大きな枝のひとつが地面に接してさらに伸びている様子が描かれている。現在、大クス本体から少し離れた所に子グスと呼ばれるタブノキがあり、元々は大クスの枝であったものが分離して成長したのではないかと言われている。

近世に関係する主な香取遺産	
国指定	佐原の山車行事、伊能忠敬関係資料、伊能忠敬旧宅、下総佐倉油田牧跡、府馬の大クス
県指定	
市指定	実相寺山門、常葉檀林
未指定他	小見川藩陣屋跡



近世に関係する主な香取遺産の分布

（５）近・現代

明治４（1871）年政府は廃藩置県の令を発した。それまで藩政に基づいて置かれていた多くの小県も整理され、市域は新治県（にいはりけん）に属することとなった。新治県は現在の茨城県南部と千葉県東部にあたり、県庁所在地は土浦（つちうら）にあった。その後、明治８（1875）年の統合により、新治県は廃され、利根川以南の多くは千葉県に編入された。

近代化が進み、蒸気船や鉄道が運行するようになると、工業・商業はめざましい発展を遂げ、開拓や観光業が盛んになった。この地域にも多くの観光客が訪れるようになり、「水郷の舟遊び、銚子の磯遊び」と称された。

現代では江戸時代から伝わる佐原の町並みや香取神宮、佐原の大祭を中心に観光客が訪れる観光地となっている。農業も地形を生かして米・野菜・畜産とバランスのとれた生産を行っており、観光農園なども増えてきている。

①利根川下流域治水の要・横利根閘門

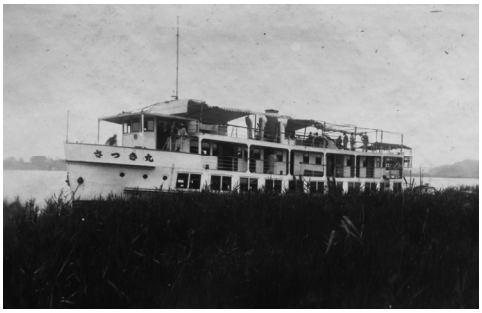
江戸時代の利根川東遷事業は、佐原の発展や新田開発による新島の成立に寄与したが、大雨による氾濫などにも悩まされた。このため、近代になると政府による大規模な利根川改修工事が行われた。明治33（1900）年に始まった工事は、３期に分けて行われ、昭和５（1930）年に竣工した。洪水を防ぐための築堤（ちくてい）や川床の浚渫（しゅんせつ）、湾曲した流路の直線化、水門などの設置が行われた。

横利根閘門

この第２期工事で建設されたのが横利根閘門（よことねこうもん）である。日本で最大級の規模を持つ煉瓦（れんが）造閘門で、横利根川南端、利根川との合流点（茨城県稲敷市）に位置している。霞ヶ浦氾濫の主要因であった利根川高水時の逆流を防止し、かつ船の通航を可能とすることを目的として設けられたものである。大正３（1914）年８月に起工、同10年３月に竣工した。船の通行数は減ったものの現在も可動しており、平成12（2000）年に重要文化財に指定された。

②水郷観光の隆盛

若山牧水（わかやまぼくすい）（1885-1928）や北原白秋（きたはらはくしゅう）（1885-1942）など当時の著名な歌人による水郷地域を詠った紀行文が取り上げられると、この地域の観光人気が高まった。昭和５年には水上プロペラ機による観光飛行、翌６年には、水郷遊覧船の「さつき丸」が就航した。当時国内最大の浅喫水船（せんきっすいせん）で、全長50m、155トンの一



観光船「さつき丸」（昭和９年頃）

部３階建ての白い船体は「水郷の女王」とも呼ばれた。土浦・潮来・鹿島を行き交い、多くの観光客を運んでいた。

水郷はあやめの名所でもあり、現在は水郷佐原あやめパークが整備され、あやめ祭り・はす祭りに多くの観光客が集まる。

③佐原の町並み観光

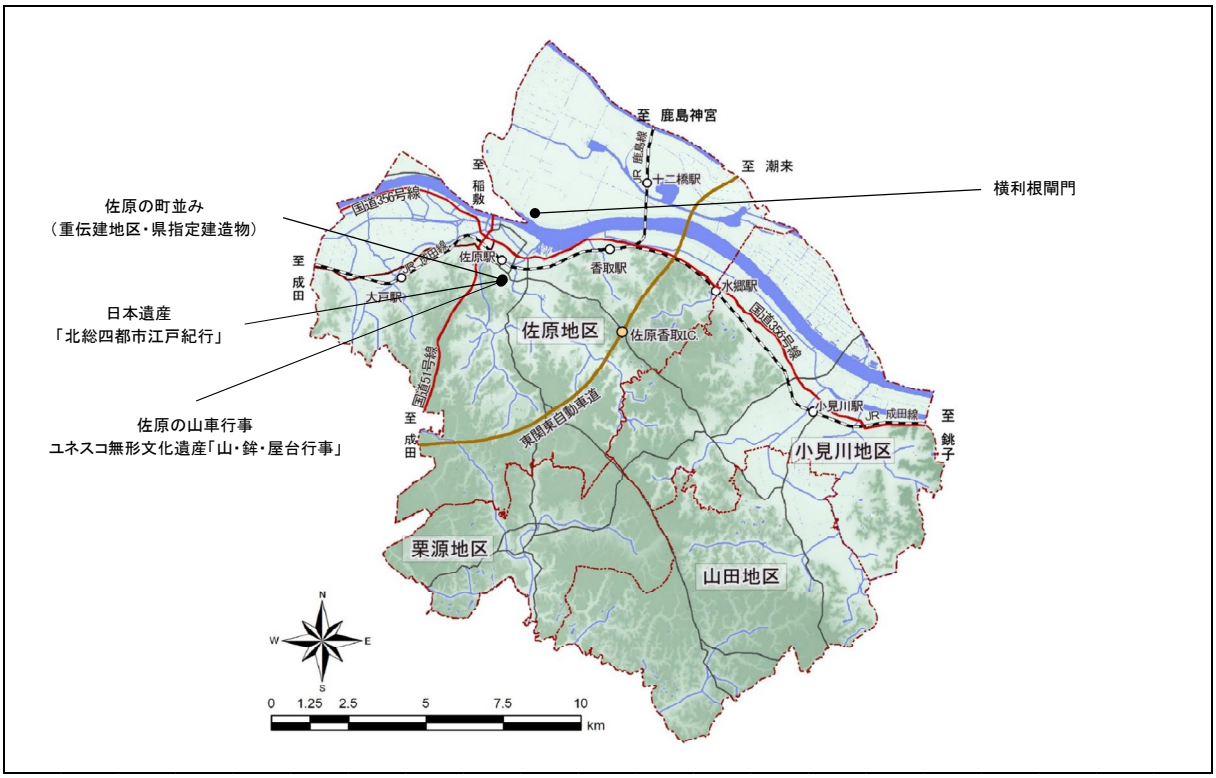
舟運で栄えた佐原は、明治 31（1898）年に佐原駅まで鉄道が開通すると、鉄道輸送が発達した近代において流通拠点としての重要性が低下していった。かつて江戸後期から明治まで栄えた佐原は、大規模開発などが行われなかったことで往時の町並みの面影を残していた。昭和 50 年代からこの町並みを積極的に保存していこうという機運が生まれ、「佐原の町並み」として歴史的景観を今に伝えることで、観光客で賑わう町となっていった。平成 8（1996）年には、関東地方で初めて国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、現在は、さらなる保存と活用が進められている。

今に伝わる町並・正上醤油店とだし（左は昭和初期、右は平成 29 年）

平成 23（2011）年の東日本大震災では、歴史的な建造物の多くが被災し、小野川の護岸も崩れるなどして、その景観は一変したものの、地元の努力と多方面からの支援などにより、現在ではその景観を取り戻し、観光客数も震災前の水準にまで回復している。

平成 28（2016）年には日本遺産「北総四都市江戸紀行」のストーリー構成都市として認定され、また、佐原の山車行事が全国の「山・鉾・屋台行事」のひとつとして、ユネスコ無形文化遺産に登録されるなど、今後の更なる観光振興が期待される。

近・現代に関係する主な香取遺産	
国指定等	佐原の町並み（香取市佐原伝統的建造物群保存地区）、佐原の山車行事、横利根閘門（稲敷市）
県指定	三菱銀行佐原支店旧本館、中村乾物店、正上醤油店、油惣商店、正文堂書店、小堀屋本店、福新呉服店、中村屋商店
市指定	
未指定他	日本遺産「北総四都市江戸紀行」、ユネスコ無形文化遺産「山・鉾・屋台行事」



近・現代に関係する主な香取遺産の分布

（６）祭礼行事と生活・文化

①当地域に独特な祭礼行事

香取神宮の第一摂社の側高神社（大倉）で、古くから行われている奇祭に「ひげなで祭」がある。1 月上旬に行われる当番引継ぎ行事で、東西に向かい合って座った祭当番（現当番）と請当番（次当番）が大杯の酒を勧めあう。その際、立派な髭をたくわえた祭当番が髭をなでて酒を勧めるユーモラスな姿が見物客の笑いを誘う。

山倉大神鮭祭り

山倉大神（山倉）では、12 月初旬に栗山川を遡上してきた鮭を献納する祭礼である山倉大神の鮭祭りが行われている。「初卯大祭」とも呼ばれ、小さい切り身にされた鮭で奉製された護符が用意される。この山倉大神は江戸火消しの信仰も篤く、境内には多くの関連する奉納物を見ることができる。

②十二座神楽と獅子舞、獅子神楽

市内各地区では神社の例祭などに奉納される神楽が伝承されているが、その形態は大きく二つに分かれる。一つは市の東南部に広く分布する十二座神楽で、境内に設けられた舞台で、面を付け神に扮した舞方と囃子方により、12 前後の演目が順々に演じられるものである。2 月下旬から 4 月初旬にかけて各所で奉納される。現在は白川流十二神楽（八重垣神社・新里）、木内神楽（木内神社・木内）、愛宕神社神楽（府馬）、山倉大神白川流十二座神楽（山倉）、長岡稲葉山神社神楽（長岡）、油田神楽（大宮神社・油田、現在休止中）、境宮神社の十二面神楽（一ノ分目）が継承されている。

十二座神楽

一方、中央部から西部にかけて分布するのが獅子神楽、獅子舞である。獅子神楽は、獅子頭を被り前足、後ろ足の二人立ちで舞うもの、獅子舞は、三頭立ての一人立ちで舞うものである。主なところでは、大崎大和神楽（白幡神社他・大崎）、新市場神楽（天宮神社・新市場）、本矢作区の神楽（天宮神社他・本矢作）、下小野神楽（八幡神社・下小野）、浅黄

獅子神楽

の神楽（祖波鷹神社・岩部）、多田の獅子舞（妙見神社・多田）、牧野大神楽（高天神社・牧野）、返田神社の獅子神楽・獅子舞（返田）が継承されている。

③式年祭

市内には、例年催行される祭礼とは別に、一定年数ごとに式年祭が行われている神社がある。特に盛大に行われるのが、香取神宮の式年神幸祭で 12 年ごとの午年に催行される。4 月 14 日に勅使参向の後、15 日、16 日の二日間をかけて式年神幸祭が行われ、香取から津宮、佐原を巡幸する。

この他、若宮八幡宮（志高）の神幸祭は 12 年ごと、豊玉姫神社（貝塚）の銚子御神幸や戸田神社（米野井）の神幸祭は 20 年ごとに行われている。大戸神社（大戸）の神幸祭にいたっては 60 年ごとに行われ、市内の式年祭では最も周期が長い。

④川から生まれた生活文化

市域には、北部を西から東へ貫流する利根川に加え、小野川や黒部川、大須賀川、栗山川などがあることから、川と密接に関係した特徴ある生活文化が生まれている。利根川付近には低湿地帯が広がっていたことから、新島地域では道路の代わりにえんま（江間）と呼ばれる水路が縦横に流れ、そこをさっぱ舟と呼ぶ小舟で移動することを常としていた。また、増水時の避難小屋と蔵を兼ねた水塚を設けるなどの工夫もされている。加藤洲では集落内の川を渡るための小橋が架けられ、加藤洲の十二橋とも呼ばれ、観光名所の一つになっていた。

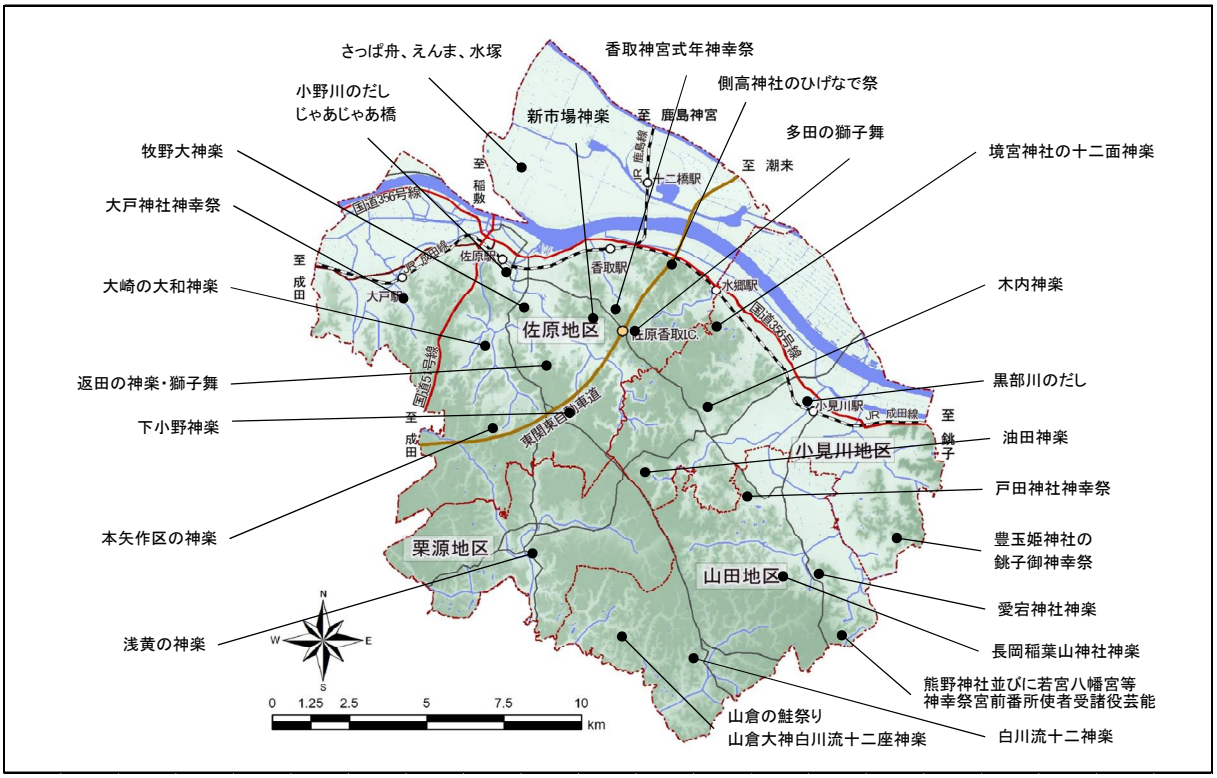
現在も使われている水塚

また、佐原や小見川は利根川下流域の河岸場として発展してきたが、そこを流れる小野川や黒部川には人や荷物を乗降させるための「だし」と呼ばれる階段状の船着き場が両岸に並んでいた。現在、その一部が残り往時の景観の一端を見せている。

佐原の伊能忠敬旧宅前には、江戸時代に農業用水を対岸に渡すために架けられた樋橋（通称じゃあじゃあ橋）がある。現在はその役割は終え、観光用に改修した形で残されている。橋の下からじゃあじゃあ流れ落ちる水音は、「樋橋の落水」として平成 8 年に当時の環境庁から「残したい日本の音風景 100 選」の選定を受けている。

樋橋（じゃあじゃあ橋）

祭礼行事と生活・文化に関係する主な香取遺産	
国指定	
県指定	山倉の鮭祭り
市指定	ひげなで祭、大崎の大和神楽、下小野の神楽、本矢作区の神楽、多田の獅子舞、牧野大神楽、山倉大神白川流十二座神楽、白川流十二神楽、長岡稲葉山神社神楽、愛宕神社神楽、油田神楽、木内神楽、熊野神社並びに若宮八幡宮等神幸祭宮前番所使者受諸役芸能
未指定他	境宮神社の十二面神楽、浅黄の神楽、返田神社の神楽・獅子舞、香取神宮式年神幸祭、大戸神社神幸祭、豊玉姫神社神幸祭（銚子大神幸）、戸田神社神幸祭、さっぱ舟、えんま（江間）、水塚、小野川のだし、じゃあじゃあ橋、黒部川のだし



祭礼行事と生活・文化に関係する主な香取遺産の分布

（７）香取市と関わりのある人物

本市と関わりのある人物としては、初めて実測による日本地図を作製した伊能忠敬（いのうただたか）が著名であるが、その他にも多くの学者・文人などが挙げられる。

香取市の主な人物一覧

名前	略歴	地区（大字）
飯篠長威斎家直（いいざさちょういさいいえなお）	正長元(1428)年～長禄2(1488)年。我が国最古の武術天真正伝香取神道流の流祖。香取郡飯笹村（現多古町飯笹）の出身、丁子村山崎に移り住んだ。香取神宮の梅木山不断所にこもり、千日千夜の修行の香取神道流を編みだした。 【指定】(県)天真正伝香取神道流始祖飯篠長威斎墓、(県)武術　天真正伝香取神道流、(市)天真正伝香取神道流道場	香取
伊藤泰歳（いとうやすとし）	天保11(1840)年～大正8(1919)年。香取神宮神官。八州刀士。15歳の時分飯司家の養嗣子となり、翌年家督を継ぐ。安政4年、分飯司職に補せられる。共同で尚古館を設立し、廃絶されていた神幸祭を再興、香取古文書を編纂刊行。	香取
伊能忠敬（いのうただたか）	延享2(1745)年～文政元(1818)年。三郎右衛門、勘解由。山辺郡小関村（九十九里町小関）に生まれ、宝暦12(1762)年に佐原の伊能家の養嗣子となる。名主後見も務め、功績により苗字帯刀を許された。50歳の時家督を子景敬に譲り、江戸の高橋至時のもとで天文・暦学を学び、その後全国測量を行い、初めて実測による日本地図「大日本沿海輿地全図」を作製した。 【指定】(国宝)伊能忠敬関係資料、(国)伊能忠敬旧宅、(市)伊能忠敬墓、(市)伊能忠敬関係資料	佐原
伊能穎則（いのうひでのり）	文化3(1806)年～明治10(1877)年。国学者、歌人。蒿村、梅雨。神山魚貫、小山田与清、井上文雄に学んだ。嘉永元年、家業の呉服商を廃し江戸で家塾を開き、国学および和歌を教授した。明治2年大学の大助教に任ぜられ、御前で『令義解』を講義した。晩年、香取神宮の少宮司として任を果たした。 【指定】(市)伊能穎則墓	佐原
今泉恒丸（いまいずみつねまる）	宝暦元(1751)年～文化7(1810)年。俳人。奥州田村郡三春常磐（福島県）の生まれ。秋田侯に仕え、42歳で家督を譲り旅に出たのち、加舎吉春に俳諧を学び、文化3年、佐原に住む。佐原在住は4年間であったが、門をくぐる俳人は4,000人を数え、小林一茶も生前と死後に二度佐原を訪れた。 【指定】(市)今泉恒丸墓	佐原
鵜沢宇八（うざわうはち）	慶応3(1866)年～昭和18(1943)年。自治功労者。県議会議員等を経て、衆議院議員に8回当選、貴族院議員にも籍を置く。実業家としても鉄道や海運会社等の取締役もつとめた。	沢
内田正信（うちだまさのぶ）	慶長18(1613)年～慶安4(1651)年。三代将軍家光の奥小姓であった正信は、寛永16(1639)年に旧小見川村周辺を加増され1万石の大名に列せられる。慶安2(1649)年には下野国に加増され鹿沼に居所を定めた。1651年の家光死去に際し殉死した。 【指定】(市)小見川藩主内田氏関連位牌	小見川
大須賀庸之助（おおすかようのすけ）	嘉永3(1850)年～明治37(1904)年。明治期の政治家。並木栗水に学ぶ。磯山戸長、大区議員、地租改正総代、千葉県属・香取郡長を経て第一回衆議院議員に当選。四期国政に参与した。地元の陳情を受け、十六島排水機の設置運動などに尽力した。	磯山
楫取魚彦（かとりなひこ）	享保8(1723)年～天明2(1782)年。歌人、国学者。伊能姓、茂左衛門。17歳にして伊能家世襲の佐原村名主をつとめる。寒葉斎建部綾足に絵と俳諧を学び、好んで梅と鯉を描いた。「鯉の魚彦」として名を知られている。明和2(1765)年、42歳の時、家督を子景序に譲って江戸に出て、賀茂真淵に学んだ。『古言梯』をはじめ多くの著作を残す。 【指定】(市)楫取魚彦墓	佐原
久保木清淵（くぼきせいえん）	宝暦12(1762)年～文政12(1829)年。儒学者。太郎右衛門、臨川蟠龍、仲黙、竹窓。根本寺の松永北溟に和漢の学、朱子学を中心に諸家の研究、書道にも通じた。領主から苗字帯刀を許され、常陸行方郡延方村の郷校で経学を講義した。渡辺崋山と交友があり、小藤樹と評された。伊能忠敬と親交が深く、地図製作や図面の細字の記入など尽力し、忠敬没後も『沿海実測録』などの完成に携わった。 【指定】(県)久保木竹窓遺品、久保木竹窓遺跡	津宮
坂本桃淵（さかもととうえん）	嘉永6(1853)年～大正14(1925)年。画家。雪舟14世雪山等林に学ぶ。成人して佐原の市街地に住み、提灯の制作で生計を立てていた。やがて青野逸山に書、三森幹雄に句を学ぶ。晩年に沢田重穎に和歌を学び、最晩年は仏弟子となり、光恵と号した。 【指定】(市)坂本桃渕遺作	佐原
佐藤尚中（さとうたかなか）	文政10(1827)年～明治15(1882)年。医者。舜海。江戸で学んでいたが佐藤泰然の養子となり、佐倉藩医となった泰然について順天堂で助手として活躍。万延元(1860)年から1年間長崎に遊学した。明治政府に請われて「大学大博士」、大学大丞に任用されるも間もなく辞職。東京湯島に順天堂医院を開き、後に発展して順天堂大学となる。 【指定】(県)佐藤尚中誕生地	小見川
神野角助（じんのかくすけ）	不明～慶長7(1602)年。領主。天正年間中に貝塚領主として迎えられ、慶長年間貝塚にて没したという。木内胤統に敗れた府馬勝若に頼られた際に僧になることをすすめた。来迎寺に宝篋印塔があり、高さは2m。 【指定】(市)来迎寺宝篋印塔	貝塚

名前	略歴	地区（大字）
頭白上人（ずはくしょうにん）	生没年不明。僧侶。高貴の血筋で、生まれながらにして白髪であった。西蔵院の住職となる。地域住民の平安と、一火で母屋二種以上焼かぬようにと入定。後に上人を慕う人々が塚を築いた。 【指定】(市)頭白上人塚	大根
清宮秀堅（せいみやひでかた）	文化6(1807)年～明治12(1879)年。漢学者。利右衛門。領主津田氏から苗字帯刀を許され、同家の財政管理を20余年つとめた。地理に詳しく、新治県の地誌編集雇として香取・海上・匝瑳の『三郡小誌』をまとめた。『下総国舊事考』は30年をかけて書き上げた。 【指定】(市)清宮秀堅墓	佐原
平良文（たいらのよしぶみ）	仁和2(886)年～天暦6(952)年。武将。平将門の叔父にあたる。晩年を過ごしたという館址が阿玉台に残っており、明治22(1889)年から小見川町に合併するまであった良文村の起源となった。	阿玉台
竹内東白（たけうちとうはく）	文政5(1822)年～元治元(1864)年。医学者。秀明。農業に従事していたが、江戸の坪井誠軒に蘭学と泰西医道、大坂の緒方洪庵に医道、京都で蘭学医術を学んだ。『泰西王氏銃譜』、『皇国火攻神弩図説』等、西洋に通じた砲術関係の著書を遺した。 【指定】(市)竹内東白の事蹟(著書)	新里
土井利勝（どいとしかつ）	元亀4(1573)年～寛永21(1644)年。徳川家康・秀忠・家光三代に仕え、老中・大老をつとめた。慶長7(1602)年～同15(1610)年小見川藩主となり、元和7(1615)年～寛永10(1633)年佐倉藩主として小見川を領した。 【指定】(市)土井利勝植林指導地、土井の新堤	小見川
東胤頼（とうのたねより）	久寿2(1155)年～安貞2(1228)年。千葉氏中興の祖となる平常胤の六男で、源頼朝から偏諱を授けられ胤頼と称した。建保6(1218)年に森山城を築いて移り、「東」を名乗った。芳泰寺に胤頼夫妻の墓とされる五輪塔が残る。 【指定】(市)森山城主東胤頼夫妻の墓	岡飯田
鳥居元忠（とりいもとただ）	天文5(1536)年～慶長5(1600)年、徳川家康の功臣。天正18(1590)年、豊臣秀吉が小田原城を征した後、上総・下総の各城を制圧。徳川家康の封が関東に移った際に矢作領4万石を受領する。慶長5年に伏見城を守り石田三成に攻められ自刃。	岩ケ崎
中川吉造（なかがわきちぞう）	明治4(1871)年～昭和17(1942)年。建築技師。奈良県高田町(現大和高田市)出身。帝国大学で工学博士の学位を取得し、内務省技師となる。利根川改修工事や横利根閘門の建設に携わった。近代河川土木事業の先駆者として活躍した。利根川堤防上に胸像が建つ。	佐原
鍋島忠茂（なべしまただしげ）	天正11(1583)年～寛永元(1624)年、初代肥前鹿島藩主。関ヶ原の戦いで鍋島家は西軍を支持、その後忠茂が小姓として徳川秀忠に仕え、忠勤ぶりを評価され、下総矢作領5,000石を下賜された。慶長14(1609)年に鍋島藩支藩として鹿島藩2万石が創設された際に初代藩主となった。円通寺(上小川)は菩提寺として忠茂により再建、鍋島氏が統治した初代から五代目までの墓所がある。 【指定】(市)肥前鹿島藩鍋島氏の遺跡	上小川
並木栗水（なみきりっすい）	文政12(1829)年～大正3(1914)年、学者、教育者。久賀村(現多古町久賀)出身。佐原で葛井温に学び、江戸に出て大橋訥庵に主に程朱を学ぶ。師の『周易私断』の完成に寄与し、詩集に『栗水魚樵』もある。佐原に螟蛉塾を開き、指導にあたった。	佐原
府馬時持（ふまときもち）	不明～永禄8(1565)年、府馬城主。代々府馬城城主の家系であったが、永禄8(1565)年に安房里見氏の将・正木時忠と共に、米野井城主木内氏と戦って討死し、嫡子勝若は僧となったため、一族は庶流に移ったとみられる。 【指定】(市)来迎寺宝篋印塔	府馬
松平家忠（まつだいらいえただ）	弘治元(1555)年～慶長5(1600)年、武将。徳川家康に従う歴戦の武将で、文禄3(1594)年に小見川に封入され、小見川城を中心とし一万石を領する小見川藩がはじまる。家忠は慶長(1600)5年山城伏見城で鳥居元忠と共に討死する。	小見川
松永北溟（まつながほくめい）	元禄11(1698)年～安永9(1780)年。僧侶。呑舟。母が産後間もなく他界、父も北溟三歳の時に亡くなる。近隣の人に育てられ、7歳で飯岡観世寺に引き取られたが、佐倉藩の松永操雪を頼って出奔、その後江戸に出て林大学頭の門に入る。雲水の旅に出て、津宮の久保木太郎右衛門を頼り根本寺の住職となる。 【指定】(市)松永呑舟墓	津宮
初代　松本幸四郎（しょだいまつもとこうしろう）	延宝2(1674)年～享保15(1730)年。歌舞伎役者。小四郎、大和屋。島田家に生まれる。15歳で江戸に出て久松多四郎の門人となり、松本小四郎と名乗る。享保13(1728)年に市村座の弁慶役が当たり役となり、二代目市川団十郎と並び当代の名優とされた。善光寺の墓石は死後20年以上たってから建立されたもの。 【指定】(県)初代松本幸四郎墓	小見川
源満仲（みなもとのみつなか）	延喜13年(913)～長徳3年(997)。摂津多田庄の武将。天慶の乱(939年)で平将門討伐に派遣された際に、陣を構えた場所が摂津多田に似ていることから、地名を多田と名付け八幡山光明院を建立した。境内に源満仲を供養したという五輪塔も残る。 【指定】(市)源満仲伝承地	多田
茂蘭上人（もらんしょうにん）	不明～安永8(1779)年、僧侶・俳人。大乗寺21代住職日従のことで、俳号を茂蘭と称した。宝暦・明和(1751～1771)の頃に活躍した。大乗寺の境内に「きつつきや己がこだまにふりかえり」の句が刻されている。	岩部
渡辺操（わたなべみさお）	安政2(1855)年～大正9(1920)年、教育者。存軒。26歳で上京し信夫恕軒の漢学塾・奇文欣賞塾で学ぶ。現在の県立小見川高等学校の前身小見川農学校に発展する「無逸塾」を創設して、当時少なかった中等教育機関として人材の養成につとめた。	久保

２．香取遺産の概要と特徴

（１）指定等文化財の概要

市内に所在する様々な香取遺産のうち、文化財保護法や県・市文化財保護条例で指定、選定、登録などにより保護措置を受けている指定等文化財は、令和４（2022）年４月１日現在で 190 件所在する。その内訳は国指定文化財が 14 件（うち国宝２件）、県指定文化財が 46 件、市指定文化財が 126 件で、この他に国の重要伝統的建造物群保存地区の選定が１件、国の登録有形文化財の登録が３件となっている。県内自治体においてその数を比較すると、国指定等文化財の件数は県内で２番目、県指定文化財の件数は最も多く、市指定文化財の件数も県内で４番目である。県内自治体の中でも、本市は質・量ともに文化財に恵まれている。加えて、重要伝統的建造物群保存地区の選定は本市のみである。

種類			国		県		市指定	合計
			指定・選定	登録	指定	登録		
有形文化財	建造物		1	3	13	0	16	33
	美術工芸品	絵画	0	0	0	0	10	10
		彫刻	1	0	5	0	9	15
		工芸品	4	0	7	0	4	15
		書跡・典籍	0	0	0	0	2	2
		古文書	1	0	2	0	9	12
		考古資料	0	0	7	0	13	20
		歴史資料	1	0	1	0	11	13
無形文化財			0	0	1	0	0	1
民俗文化財	有形の民俗文化財		0	0	2	0	4	6
	無形の民俗文化財		1	0	2	0	14	17
記念物	遺跡		4	0	5	0	29	38
	名勝地		0	0	0	0	1	1
	動物、植物、地質鉱物		1	0	1	0	4	6
文化的景観			0	－	－	－	－	0
伝統的建造物群			1	－	－	－	－	1
計			15	3	46	0	126	190

香取市の指定等文化財一覧　（令和４年４月１日現在）

指定等文化財の分布の傾向としては、香取神宮周辺、香取市佐原伝統的建造物群保存地区周辺に集中する傾向があるが、概ね市内全域に広く分布する。各地区にそれぞれ特色を持っており、それが結果的に文化財の件数の増加につながっている。

（２）未指定文化財等の概要

未指定文化財及びその他の歴史・文化資産は、これまで実施された各種調査で、総数として9,602件を確認している。

香取遺産に関連する調査として、これまで合併前の市町や香取市での調査や文化財保存活用地域計画作成に伴う調査、埋蔵文化財の発掘調査、千葉県や国の総合調査や県史編纂事業に伴う調査、また研究機関や民間団体が主体となった調査等も行われている。これまでに香取市内で行われた調査のうち、未指定文化財等の把握内容をまとめると下記の表の通りとなる。

類型			把握件数	概要
有形文化財	建造物	社寺建築	406カ所	歴史的風致維持向上計画や文化財保存活用地域計画作成に伴い市で調査を進めている。市内の124大字に神社・寺院がほぼ各一カ所以上あり、市街地では数が増える傾向がある。
		社寺建築以外の歴史的建造物	281	『千葉県の近代和風建築』のほか文化財保存活用地域計画作成にあたって市で調査を行った。佐原地区や小見川地区の中心部のほか、大字香取、府馬、山倉、岩部で把握されている。
	美術工芸品	美術工芸品	381	『千葉県文化財実態調査　絵馬・奉納額・建築彫刻』等で把握が進められている。香取神宮や観福寺で詳細調査が行われているが、多岐にわたるためそれぞれ1件とした。
		古文書	110件	香取神宮関係の文書群（香取文書）や、佐原の名主などをはじめとする文書群の調査が行われている。特に香取文書は関東では中世屈指の資料群として各種調査が行われている。
		石造物	7,233	各地区で調査や記録が多く、『佐原市石造物目録』、『小見川の石造物』などで詳細な記録が残されている。板碑、社寺奉斎物、道標、文学碑など種類も多岐にわたる。
無形文化財			11	『千葉県の諸職』で市内では11件の伝統的職業（宮大工、太鼓など）が確認されている。
民俗文化財			71	『千葉県の民俗芸能』、『千葉県祭り・行事調査』など、各種の主題ごとに調査が行われている。
記念物	遺跡	包蔵地	991	市内には令和4年8月31日現在で1,029件の埋蔵文化財包蔵地があり、うち38件が指定されている。
	動物、植物、地質鉱物		104	旧山田町で国天然記念物・府馬の大クス以外にも73本の天然巨木が確認されている。
文化的景観			2	調査は進んでいないものの、「水郷」と「谷津田」が文化的景観の候補として検討されたことがある。
伝統的建造物群			1	文化財保存活用地域計画作成に伴い、令和2年度に小見川地区中心部の把握調査、令和3年度に同地区の前年の調査を踏まえて基礎調査を行った。
歴史の道			9	佐原や小見川を中心に、周辺都市へと繋がる陸路や水路が確認されている。
近現代資料			2	古写真集とフィルム映像集がそれぞれ1件確認されている。
合計			9,602	

香取市の未指定文化財等一覧　（令和４年４月１日現在）

（３）ユネスコ無形文化遺産・日本遺産

指定等による保護措置のほかに、文化財の保護や活用に関連する制度として、ユネスコ無形文化遺産の登録や日本遺産の認定などがある。

香取市に所在する指定等文化財のうち、重要無形民俗文化財「佐原の山車行事」が、平成 28（2016）年 12 月に県内で唯一ユネスコ無形文化遺産に登録されている。また、同じく平成 28 年度に香取市は、佐倉市、成田市、銚子市とともに、「北総四都市江戸紀行・江戸を感じる北総の町並み」として、日本遺産の認定を受けている。

①「佐原の山車行事」ユネスコ無形文化遺産登録

国指定の重要無形民俗文化財「佐原の山車行事」は、全国「山・鉾・屋台行事」33 件の一つとして、平成 28（2016）年 12 月にユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の第 11 回政府間委員会（エチオピア・アディスアベバ）において、「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」へ記載（登録）された。県内の国指定文化財で、ユネスコ無形文化遺産に登録されたのは「佐原の山車行事」が初めてである。

ユネスコ無形文化遺産
登録記念祝賀会

②日本遺産の認定

平成 28（2016）年 4 月 25 日、「北総四都市江戸紀行」が佐倉市、成田市、銚子市とともに日本遺産（シリアル型）として文化庁の認定を受けた。平成 30 年 5 月 24 日には構成文化財の追加による変更認定された。概要は次のとおりである。

ア）ストーリータイトル

北総四都市江戸紀行・江戸を感じる北総の町並み

–佐倉・成田・佐原・銚子：百万都市江戸を支えた江戸近郊の四つの代表的町並み群–

イ）認定自治体

千葉県（佐倉市、成田市、香取市、銚子市）

ウ）ストーリーの概要

北総四都市は、百万都市江戸に隣接し、関東平野と豊かな漁場の太平洋を背景に、利根川東遷により発達した水運と江戸に続く街道を利用して江戸に東国の物資を供給し、江戸のくらしや経済を支えた。こうした中、江戸文化を取り入れることにより、城下町の佐倉、成田山の門前町成田、利根川水運の河岸、香取神宮の参道の起点の佐原、漁港・港町、そして磯巡りの観光客で賑わった銚子という四

北総四都市江戸紀行
認定地

つの特色ある都市が発展した。

これら四都市では、江戸庶民も訪れた 4 種の町並みや風景が残り、今も東京近郊にありながら江戸情緒を体感できる。

成田空港から近いこれらの都市は、世界から一番近い「江戸」といえる。

エ）ストーリーの構成文化財（香取市所在分）

構成文化財 （平成 28 年度認定時）
香取市佐原伝統的建造物群保存地区（重要伝統的建造物群保存地区） 伊能忠敬旧宅（国史跡）・伊能忠敬関係資料（国宝） 佐原の山車行事（重要無形民俗） 香取神宮〈本殿、楼門、香取神宮旧拝殿、香取神宮勅使門、神庫、香雲閣、香取神宮拝殿・幣殿・神饌所〉/神宝類（国宝、重要文化財、県指定、市指定、国登録） 津宮河岸の常夜燈（市指定） 佐藤尚中誕生地（県指定）
追加された構成文化財 （平成 30 年度追加）
観福寺〈銅造十一面観音坐像、地蔵菩薩坐像、薬師如来坐像、釈迦如来坐像、伊能忠敬墓〉（重要文化財、市指定） 香取神道流〈天真正伝香取神道流始祖飯篠長威斎墓、武術天真正伝香取神道流、天真正伝香取神道流道場〉（県指定、市指定） 初代松本幸四郎墓（県指定）

オ）北総四都市江戸紀行ロゴマーク

北総四都市江戸紀行活用協議会では、令和元年度にロゴマークの公募を行い、令和 2（2020）年 2 月 13 日の日本遺産の日にマークの発表を行った。北総四都市江戸紀行の各種事業等でロゴマークが活用されている。

北総四都市江戸紀行
Hokuso-4cities Edokiko

３．類型毎の概要と特徴

（１）有形文化財（建造物）

建造物の指定等文化財は、国指定 1 件、国登録 3 件、県指定 13 件、市指定 16 件である。

香取神宮本殿

国の重要文化財である香取神宮本殿・楼門は、元禄 13 年（1700）に江戸幕府により造営されたものである。本殿は後庇（うしろひさし）を加えた両流造（りょうながれづくり）で、檜皮葺（ひわだぶき）、黒漆塗りの社殿である。楼門は二階建、三間一戸、丹塗りの建物で、二階には高欄付きの廻縁が付く。香取神宮境内には、国の登録文化財の拝殿・幣殿・神饌所、県指定文化財の旧拝殿や勅使門（ちょくしもん）などが指定等文化財となっている。佐原伝統的建造物群保存地区には、商家の店舗や土蔵を中心に 8 件 13 棟の建造物が県指定文化財となっている。このうち三菱銀行佐原支店旧本館は、大正 3 年（1914）に清水満之助商店（しみずまんのすけしょうてん）（現在の清水建設）の設計で川崎銀行佐原支店として建設された洋風煉瓦造の建物である。平成元年（1989）に香取市に寄贈され、佐原三菱館として親しまれている。

三菱銀行佐原支店旧本館

市指定文化財の安産大神（府馬）（あんざんだいじん　ふま）の本殿は、元は愛宕山正法院地蔵寺（あたごさんしょうほういんじぞうじ）の仏堂として建立され、明治 4 年（1871）に木花開耶姫（このはなさくやひめ）を祭神とし安産大神と改称した。本殿は、桁行・梁間とも二間半、入母屋造。正面唐破風（からはふ）付きの建物である。破風兎の毛通（けどお）しの鳳凰・向拝の双龍・四隅柱上の獅子鼻等の彫刻は精巧緻密で、小社殿ながら重厚な風格を示している。

この他、県指定文化財の西坂神社本殿（西坂（にしざか））、側高神社本殿（大倉（おおくら））、光明院阿弥陀堂（多田（ただ））、市指定文化財の真浄寺本堂（沢（さわ））、実相寺山門（苅毛（かりけ））、徳星寺本堂（小見（おみ））、などの寺院、神社建築が指定等文化財となっている。

建造物の未指定文化財としては、多くの歴史的な建造物が市内には所在するが、その中で香取神宮に関係する神社として、神宮から約 1 km西方に又見（またみ）神社本殿、三島神社本殿がある。又見神社は香取神宮の摂社で、銅板葺、一間社流造の社殿である。古墳の上に建てられており、社殿床下に石棺材が露出している。向って右側には又見古墳の石室（市指定史跡）が隣接している。又見神社の境内には、銅板葺、一間社見世棚造（みせだなづくり）の三島神社があり、後補材も多いが身舎や庇に 17 世紀中頃の手法が見受けられる。この他、日宮（ひのみや）神社本殿（田部（たべ））は一間社流造（いっけんしゃながれづくり）の社殿で、17 世紀後半頃に再建された建築と考えられている。

（２）有形文化財（美術工芸品）

①絵画

絵画分野の指定等文化財は、市指定 10 件である。

徳星寺（小見）の十六羅漢像は、中国の絵師周丹が描いた古画 16 幅で、元禄 5 年（1692）に狩野永真が徳星寺滞在中に記したとされる鑑定書が残る。岩部の日蓮宗寺院、安興寺と大乗寺にはそれぞれ仏涅槃図が所蔵されている。このうち安興寺の仏涅槃図は、画面縦 336 ㎝、横 230 ㎝の大幅で、墨書から享保 16 年（1731）僧日顕の筆になるものである。釈迦の入滅の様子を描いたもので、毎年涅槃会の際に本堂内陣に掲げられる。

②彫刻

彫刻の指定等文化財は、国指定 1 件、県指定 5 件、市指定 9 件である。

重要文化財に指定された荘厳寺の木造十一面観音立像は、像高 3.5m の大きな木像で、平安時代初期の彫刻の特徴を残した仏像である。頭部・体躯を欅材から掘り出した一木造とし、化仏、両臂、両足は別木で造られたものであるが、化仏の十面はすべて失われている。香取神宮の神宮寺であった金剛宝寺に伝来し、明治初期の神仏分離により荘厳寺へ移されたものである。

県指定文化財の納曽利面 2 面と羅龍王面 1 面は、大戸神社（大戸）に伝わる舞楽面で、羅龍王面の面裏には嘉暦 2 年（1326）の紀年銘がある。納曽利面は 2 面ともほぼ同じ大きさで、縦 19 ㎝、横 17 ㎝、羅龍王面は縦 30.3 ㎝、横 19 ㎝の大きさである。雨乞いの儀式に使用されたと言われる。光福寺（寺内）に伝わる市指定文化財の釈迦如来坐像と両脇侍は、鎌倉期の作と伝わる木造寄木造りの坐像である。主尊の釈迦如来は、像高は 65 ㎝、左脇侍の文殊菩薩は、座高は 38 ㎝の半跏像で獅子に乗っている。右脇侍の普賢菩薩も半跏像で、白象に乗り宝冠を付けている。

羅龍王面

③工芸品

工芸品の指定等文化財は、国指定 4 件（内 1 件国宝）、県指定 7 件、市指定 4 件である。

海獣葡萄鏡は、香取神宮が所蔵している中国の唐時代に盛行した海獣葡萄鏡中の優品で、8 世紀頃にもたらされたとされる。県内工芸品で唯一国宝に指定されている。中央に海獣（狻猊：獅子に似た想像上の動物）の鈕、周辺に葡萄唐草の地紋をあしらい、獣・鳥・昆虫などを配している。香取神宮にはこの他にも、久安 5 年（1149）銘が鋳出されている双竜鏡や古瀬戸黄釉狛犬が国の重要文化財に指定されている。また、観福寺（牧野）に所蔵されている懸仏 4 躯は明治初期の神仏分離により香取神宮から放出されたものを、檀家が買い求め観福寺に納めたもので、現在は重要文化財となっている。

織幡の花見寺の薬師堂には、県指定文化財の銅造薬師如来立像（像高 48.5 cm）、銅造阿弥陀如来立像（像高 46.3 cm）、銅造観世音菩薩立像（像高 33.5 cm）、銅造十一面観世音菩薩立像が納められている。いずれも鎌倉時代に流行した宋風彫刻の影響を受けており、細部の表現方法や処理の仕方、鋳造儀技術などから正統な仏師による造像と考えられる。33 年に一度、御開帳される。堂内には同じく県指定文化財の木造十一面観音菩薩立像も安置されている。

④書跡・典籍

書跡・典籍の指定等文化財は、市指定 2 件である。

久保神社（久保）に所蔵される佑天上人名号跡は、江戸時代の高僧で江戸増上寺第 36 世の佑天による「南無阿弥陀仏」の名号である。本軸には「飯沼弘経寺三十世　佑天」と記されている。神生の新福寺には市指定文化財の大般若経 600 巻が納められている。三代にわたる住職が大般若経を書き写したもので、経文が納められた箱書きから、享保 7 年（1722）の仏生日に完成したものとされる。

⑤古文書

古文書の指定等文化財は、国指定 1 件、県指定 2 件、市指定 9 件である。

国の重要文化財である大禰宜家文書は、香取神宮の旧社家であった大禰宜家に伝来する史料で、平安時代から江戸時代に至る古文書群である。海夫注文や応永 6 年（1399）の香取神領検田取帳など、県内の中世文書として最もまとまって残されている。

県指定文化財の天正検地帳（木内郷、長岡村、岡飯田村）のほか、荒北村、志高村、府馬郷などの江戸時代の検地帳が市指定文化財となっている。

⑥考古資料

考古資料の指定等文化財は、県指定 7 件、市指定 13 件である。

県指定文化財の関峯崎３号横穴出土金銅製押出仏は、関峯崎横穴群（関）の３号横穴から出土したもので、7 世紀後半の製作と考えられる。中尊と脇侍を別の型で打ち出したものを、後にひとつの光背に鋲留めしたとみられる。被葬者が念持仏としていたと思われ、その没後に副葬品として納めたものとみられる。県指定文化財である城山第 1 号古墳からの出土品一括、市指定文化財でコジヤ遺跡（岩部）から出土した瓦当笵、大戸宮作 1 号墳出土の石枕などとともに、市文化財保存館で収蔵、展示している。

関峯崎３号横穴出土金銅製押出仏

考古資料では板碑の指定が多い。県指定文化財では、正元元年（1259）の紀年銘を持つ板碑 4 基、市指定文化財では県内指定文化財で最も古い紀年銘を持つ正嘉 2 年（1258）銘の板碑のほか図像板碑など 10 基の板碑が指定されている。なお、板碑

資料については、指定時の種別で建造物として指定された 4 基の市指定文化財もある。

⑦歴史資料

歴史資料の指定等文化財は、国指定（国宝）1 件、県指定 1 件、市指定 11 件である。

本市を代表する人物である伊能忠敬の関係資料は、県内４件目の国宝に指定された伊能忠敬の事績に関わる歴史資料である。地図・絵図類 787 点、測量日記などの文書・記録類 569 点、書状類 398 点、天文暦学書などの典籍類 528 点、器具類 63 点で、総数は 2,345 点にのぼる。地図・絵図類には成果品の沿海地図中図や下図など、器具類は象限儀（しょうげんぎ）、量程車（りょうていしゃ）などの測量器具がある。伊能忠敬記念館にて収蔵、展示している。

〔沿海地図（中）東海道・北陸道・東山道〕

久保神社（久保）には、千葉宗家 24 代の家督を継いだ千葉親胤を描いた御影や、久保神社の神幸行例を描いた絵図が残されており、2 件とも市指定文化財となっている。

千葉親胤御影

小見川の本願寺には、小見川藩主内田氏歴代の関連位牌 54 基が残されている。小見川藩に関する資料が少ない中で、貴重な歴史資料である。また、香取神宮で近世以前に境内鎮護のために安置されていたとされる八龍神像は、他に類例のない神像で 8 躯すべてが残されている。いずれも市指定文化財となっている。

有形文化財（美術工芸品）の未指定文化財としては、国史跡下総佐倉油田牧跡に関する絵図である油田牧御野馬立場絵図（大根・個人蔵）や、香取神宮神幸祭絵巻（個人蔵など複数件）がある。また、考古資料として、山之辺手ひろがり遺跡から出土した石枕、木内（きのうち）廃寺の出土瓦のほか、大崎城跡から出土した文禄 4 年銘の木製塔婆などがある。

（３）無形文化財

無形文化財で唯一の指定等文化財としては、県指定の武術天真正伝香取神道流がある。香取神道流とは、室町時代中頃に飯篠長威斎家直により始まった武術の流派で、その後に多くの流派に影響を与えたことから、武道の源流の一つと言われる。太刀、居合抜刀、棒、槍、長刀、柔術などいわゆる武芸十八般にわたり、その型の大半はトンボ伝書と呼ぶ極意書とともに、宗家により継承され、また師範により門弟の指導が続けられている。

未指定の無形文化財としては、和太鼓の製作技術がある。佐原囃子や地域の祭礼で使用する太鼓等の用具の製作や修理に係る技術を代々受け継ぎ、「佐原太鼓（さわらだいこ）」として千葉県指定伝統的工芸品ともなっている。

（４）民俗文化財

①有形民俗

有形民俗文化財の指定等文化財は、県指定２件、市指定４件である。

県指定有形民俗文化財に指定されている浄福寺の鬼舞面は、浄福寺（下小堀）に伝来するもので、正徳２年（1712）２月に上演した台本である『鬼来迎問答引接踊供養由来記』、上演時に用いた33面の仮面、若干の衣裳が保存されている。当寺の開山良忠（正治元年〈1199〉～弘安10年〈1287〉）が「鬼来迎」や「鬼舞」の仏教劇を考案したという。

浄福寺の鬼舞面

市指定有形民俗文化財としては、佐原の山車行事に関係するものとして、八坂神社旧神輿、下仲町区山車人形菅原道真、旧関戸町の猿田彦がある。

②無形民俗

無形民俗文化財の指定等文化財は、国指定１件、県指定２件、市指定14件である。

国の重要無形民俗文化財に指定された佐原の山車行事は、本宿と新宿のそれぞれの鎮守社祭礼の付け祭りが大きく発展したものである。夏７月には本宿の八坂神社の祇園祭、秋10月には新宿の諏訪神社の諏訪祭が行われる。各町内の大人形などを載せた山車が、日本三大囃子とも称される佐原囃子の調べにのり佐原の町並みの中で曳き廻される。平成28年（2016）には「山・鉾・屋台行事」の一つとしてユネスコ無形文化遺産に登録された。

新宿・諏訪祭の風景

県指定無形民俗文化財の山倉の鮭祭りや市指定無形民俗文化財の側高神社ひげなで祭は、他に例を見ない本地域独特の祭礼行事である。また、市内には十二座神楽と獅子舞・獅子神楽の奉納神楽が伝承されている。十二座神楽は八重垣神社の白川流十二神楽など６件、獅子舞・獅子神楽は多田の獅子舞や大崎の大和神楽など６件が市指定無形民俗文化財となっている。

未指定の無形民俗文化財としては、十二座神楽である境宮神社（一ノ分目）の十二面神楽がある。毎年３月末に奉納される。また、獅子舞、獅子神楽では、祖波鷹神社（岩部）に奉納される浅黄の神楽や返田神社（返田）の獅子神楽・獅子舞がある。式年祭では、香取、佐原の両地区を巡幸する香取神宮式年神幸祭（12年ごと）のほか、戸田神社（米野井）の神幸祭（20年ごと）、豊玉姫神社（貝塚）の神幸祭（銚子大神幸、20年ごと）、大戸神社神幸祭（60年ごと）がある。

（５）記念物

①遺跡

遺跡分野の指定等文化財は、国指定 4 件、県指定 5 件、市指定 29 件である。

良文貝塚（貝塚）は、縄文時代中期から晩期まで幅広い年代の遺物が出土している。明治時代より調査が行われたが、昭和 2 年（1927）、昭和 4 年には大山史前学研究所と地元有志により発掘調査が行われ、県指定文化財となった香炉形顔面付土器も発見された。昭和 5 年（1930）には県内初の国指定史跡の貝塚となった。そこからやや北に位置する国指定史跡の阿玉台貝塚は、縄文時代中期前半の阿玉台式土器の標式遺跡となっている。この他、貝塚では県指定史跡の下小野貝塚、市指定では向油田貝塚など 5 件がある。また、市指定史跡として、大型の前方後円墳である三ノ分目大塚山古墳や、又見古墳（香取・又見神社）など 6 件の古墳がある。又見古墳は又見神社の境内にあり、雲母片岩を板状に加工して組み合わせた横穴式石室で、玄門をコの字形にくり抜いた板石を使用した珍しい事例である。

良文貝塚標柱

市指定史跡の城館跡として、千葉氏一族関係の本矢作城跡や大崎城跡の 2 件がある。また、江戸時代の領主に関する市指定史跡として、上小川の円通寺に肥前鹿島藩鍋島氏の遺跡がある。これは元和 8 年（1622）～元禄 12 年（1699）まで、上小川村など 5,000 石の領地を持っていた肥前鍋島藩の支藩の一つ、鹿島藩の初代藩主などの墓所である。この縁もあって、現在本市と佐賀県鹿島市とは友好都市協定を結んでいる。

肥前鹿島藩鍋島氏の遺跡

学者・文人など人物に係る史跡としては、県指定史跡の佐藤尚中誕生地（小見川・内浜公園）や初代松本幸四郎墓（小見川・善光寺）、久保木竹窓遺跡（津宮）、香取神道流始祖の飯篠長威斎家直の墓（香取）があり、市指定史跡では伊能忠敬墓（牧野・観福寺）、清宮秀堅墓（佐原・浄国寺）など 7 件の墓所がある。

九美上に所在する下総佐倉油田牧跡は令和元年（2019）に国の指定史跡となった江戸幕府直営の馬牧である。生育した野馬を選別する野馬込跡が良好に残る。

②名勝地

名勝地で唯一の指定等文化財では、市指定の橘堰（たちばなぜき）がある。田部（たべ）・仁良（にら）にまたがる堰で、慶長 10 年（1605）に、当時の領主であった土井利勝が、田部村周辺の水田の水を確保するため、橘堰を築いたとされる。現在は橘ふれあい公園として風景明媚な憩いの場となっている。なお、土井利勝の事績とされるものには、市指定の遺跡となっている土井利勝植林指導地や土井の新堤の 2 件がある。

③動物、植物、地質鉱物

動物、植物、地質鉱物分野の指定等文化財は、国指定 1 件、県指定 1 件、市指定 4 件で、すべて植物や植生地に係るものである。

国の天然記念物として大正 15 年（1926）に指定を受けた府馬の大クスは、弘化 3 年（1846）の宮負定雄『下総名勝図絵』にも描かれた古木で、現在も地元の象徴として親しまれるほか、巨木・古木に関心のある見学者が途切れることなく訪れている。

樹林寺境内にある四季桜（五郷内（ごごうち））は市指定の天然記念物である。南北朝時代の応安年間（1368～1375）に開山覚源禅師の手植との伝承がある。毎年 4 月と 10 月から 1 月まで二度開花する。

樹林寺四季桜

未指定の記念物としては、遺跡では市内各所に所在する貝塚や古墳、城跡などがある。縄文時代早期の大規模貝塚である城ノ台（しろのだい）貝塚（木内・虫幡）、縄文時代中期の木内明神（きのうちみょうじん）貝塚（木内）、白井大宮台（しらいおおみやだい）貝塚（白井）が貝塚として挙げられる。古墳では、豊富な武器、武具を出土した布野台（ふのだい）3 号墳（布野）や小野川流域で浅間神社が建てられている仁井宿浅間神社古墳（佐原）、大須賀川流域の大法寺古墳（森戸）などがある。城跡では千葉氏一族の東氏の城館跡とされる森山城跡がある。その他、国史跡の下総佐倉油田牧跡につながる野馬土手跡や香取神宮遺跡などもある。植物では沢の大桜がある。『下総名勝図絵』（弘化 3〈1346〉年）で真浄寺（沢）の枝垂れ桜を沢の大桜と紹介しているが、この他に沢地区には沢の大桜として知られている山桜の古木もある。

（６）文化的景観

これまでに文化的景観として選定されたものはないが、その候補としては、新島地域の水田が広がる水郷地帯独特の景観が挙げられる。かつては江間（えんま）と呼ばれる水路をさっぱ舟で往来することを常としていたところで、水害対策として建てられた水屋が今も残る。加藤洲の十二橋は観光名所ともなっていた。また、府馬地区の北部に広がる千丈ヶ谷（せんじょうがやつ）は、広大な水田が広がる農村景観である。

（７）伝統的建造物群保存地区

県内唯一の重要伝統的建造物群保存地区として、香取市佐原伝統的建造物群保存地区 7.1ha が選定されている。

佐原の市街地を蛇行しながら流れる小野川沿いと、これに交差する香取街道沿いなどの地域は 7.1ha の範囲で、町家や土蔵、洋風建築等の伝統的建造物が建ち並び、佐原の町並みとして、近世以降の河港商業都市として繁栄した歴史的な景観を現在に伝えている。

地区内には、県指定文化財建造物の正文堂書店店舗、小堀屋本店店舗、三菱銀行佐原支店旧本館、福新呉服店店舗兼住宅・土蔵、中村屋乾物店店舗・文庫蔵、正上醤油店店舗・土蔵、旧油惣商店店舗・土蔵、中村屋商店店舗兼住宅・土蔵の 8 件 13 棟の他、主屋や土蔵などの伝統的建造物 101 棟が所在している。

小野川沿いの町並み

（８）その他の歴史・文化資産

香取遺産の定義の中で、文化財保護法に規定される６類型以外の、市の歴史、文化を語るうえで欠かせないものを「その他の歴史・文化資産」としている。また、本市で６類型としての取り扱いが定まっていない文化財も含めている。

香取市周辺の歴史の道（街道や水運の痕跡）は比較的良好に残っており、かつての銚子街道、成田街道、多古街道といった街道や香取神宮への参詣道（香取道）などのほか、利根川水運と栗山川水運を追うことができる。

また、市に寄贈された古写真集とフィルム集があり、佐原地区を中心とした近現代の状況を確認できる。これらの資料はデータ化されており、要望に応じてデータの使用申請を受け付けている。